論文審査の要旨

Summary of Dissertation Review

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	SONNY ELFIYANTO
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

A Comparative Study on the Effectiveness of Written Corrective Feedback in Improving Indonesian and Japanese Students' Writing Achievement

論文審査担当者　Dissertation Committee Member

主　　査　教授　松浦　伸和

審査委員　教授　松見　法男

審査委員　教授　山元　隆春

審査委員　教授　達川　奎三（外国語教育研究センター）

〔論文審査の要旨〕Summary of Dissertation Review

本研究は、日本とインドネシアの高校生を対象に、英語教育における作文修正フィードバックの効果を比較検証することを目的としている。教師、生徒間、自分自身のフィードバックによる英作文の質の比較のみならず、それらに関する教師と生徒の意識の差についても考察して英作文指導への示唆を得た。

第１章では、インドネシアと日本の学生の作文能力に対する作文修正フィードバックの効果を調査した研究背景を述べた。さらに、作文能力を向上させるための指導法としての修正フィードバックに対するインドネシアと日本の教師と学生の意識を調査することを言及した。そして、研究の目的、研究の意義、本論文における重要な用語の定義、論文の概要を述べた。

第２章では、英作文に関する先行研究の包括的なレビューを行った。作文の性質、作文指導、作文指導における理論的アプローチ、作文の定義などから構成されており、それぞれの視点がレビューに含まれている。また、教師と学生の作文修正フィードバックに対する意識に加えて、作文修正フィードバックの種類（教師、生徒間、自分自身）に関する先行研究も概観した。関連する先行研究と本研究の理論的枠組みも本章で説明されている。

第３章は調査１として、インドネシアと日本の高校生の作文能力を向上するための３つの作文修正フィードバックの効果を検証した。３つの異なる作文修正フィードバックのうち、どれが生徒の英文ライティング能力の向上に役立つかを比較検討した結果、インドネシアの高校生は生徒間フィードバックが、日本人高校生は教師によるフィードバックが作文を向上させるという結果が得られた。

第４章は調査２として、調査１の結果をより詳細に分析するために、インドネシアの高校生の作文に対する教師と生徒間の作文修正フィードバックの効果を比較した。そのために開発されたルーブリックを用いて生徒の統合的な英作文能力を測定し、内容、構成、文法、語彙、メカニズムなどの作文要素に関わる能力との関係を分析した。その結果、生徒間のフィードバックの方が作文力を向上させること、ならびに、教師のフィードバックはほとんどすべての要素を向上させ、生徒同士のフィードバックは構成と語彙を向上させることがわかった。

第５章は調査３として、インドネシアと日本の高校教師の授業での作文修正フィードバックの使用に対する意識について調査した。質問紙によるデータ収集に加えて、インドネシアの英

語教師 18 名と日本人英語教師 3 名との 1 対 1 の半構造化インタビューを実施した。分析手法としては、定量的なデータは因子分析を行った。また、インタビューの質的分析も本研究に統合し、結果を検証した。

第 6 章では、インドネシアの高校英語教師の英作文指導における自己作文修正フィードバックの適用に関する意識を調査した。さらに、彼らの意識が授業での実践に影響を与えているかどうかについても調査した。データは、インドネシアの高等学校の英語教師 18 人との 1 対 1 の半構造化インタビューによって収集された。

第 7 章では、インドネシアと日本の高校生の授業での作文修正フィードバックの使用に対する意識を質問紙により調査した。加えて、インドネシアと日本の高校生が作文修正フィードバックを使用しているかどうかについても調査した。さらに、本研究では、作文修正フィードバックが英作文能力、特に英作文を向上させることができるという学生の意識が変わったかどうかを調査した。

第 8 章では、インドネシアと日本の学生の作文能力向上に対する修正フィードバックの効果について考察した。EFL 環境での作文指導において、修正フィードバックを用いることがより良い指導法であり、この事例はインドネシアと日本を代表するものであることが考察の中心になっている。また、本章では、インドネシアと日本の教師と学生の作文修正フィードバックに対する嗜好に関する因子分析の結果について考察した。

第 9 章では、本実験研究から得られた研究成果とその教育学的示唆について考察し、今後の研究に向けての示唆を述べた。

本研究で得られた知見は、EFL 教師（この場合はインドネシア人と日本人の英語教師）が生徒のために作文修正フィードバックの種類を選択する際に幅広く活用することが可能である。フィードバックについての方法を生徒に応じて使い分けることで、高校生の英作文の達成度を大幅に向上させる可能性がある。国によってその背景が異なることから 1 つの指導法を選択しがちになるが、生徒の英作文能力を最適なレベルに高めるためには異なる修正フィードバックを組み合わせて授業を行うことを推奨したい。また、教師と生徒間の修正フィードバックを実践することで、彼らは自己修正フィードバックが可能になり、自律的な書き手になることができるようになることも期待できる。

現在は、メールをはじめとして文章を書く機会が予想以上に多い。そのため、自立した書き手を育てる必要がある。それには作文フィードバックが重要な役割を果たしている。それを学習者が置かれている背景によって選択し分けることの必要性を具体的に明らかにした点で本論文の教育的な意義は高いと評価できる。

以上の審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3 年 2 月 15 日